80. Love TOKYO FM

PRESS RELEASE
２０１１年8月26日

報道各位

TOKYO FM 防災の日ワンデースペシャル
REMIND　3・11
～震災から学んだこと、そしてこれから～

3 月 11 日に起きた未曾有の大震災と津波。死者行方不明者は約 3 万人。震度 5 強でとどまった東京でも、7 人の方が亡くなりました。

臨時の避難所で一夜を明かしたサラリーマン、家族の安否がわからず家まで何時間も歩き続けたワーキングマザー、情報が乏しく軋む家の中にいるしかなかった体の不自由な方やお年寄り、信号が止まった交差点で交通整理を行った若者たちなど、「3・11」は、首都圏に住む我々にとっても、それぞれの記憶として体に刻まれ、残した教訓も異なります。そしてこの瞬間に発生しても不思議ではない首都直下地震では、頼れるのはもはや自分の知識と、あの日の体験から得たものだけです。

また一方で、我々ラジオメディアはいち早く首都圏の被害状況、交通情報、帰宅困難者向けの情報などを放送し続けました。このことが改めて、災害時にラジオが果たすべき役割を浮き彫りにし、その重要性が認識されることとなりました。

そこで、東日本大震災からおよそ半年にあたる 9 月 1 日の防災の日、TOKYO FM では朝から夕方までの各ワイド番組を縦断し、3・11 を様々な立場の目線で振り返る防災の日ワンデースペシャル「REMIND 3・11～震災から学んだこと、そしてこれから～」を放送いたします。

当日の反省点や、活かされたことをリスナーの声を集めて検証すると共に、対策に向けて動き出した企業や自治体、学校や保育園の動きをリポートし、いま本当に知っておかなければならないことをお伝えします。

<u>企画概要</u>

■タイトル：TOKYO FM 防災の日ワンデースペシャル「REMIND 3・11～震災から学んだこと、そしてこれから～」
■放送日時： 2011 年 9 月 1 日（木）8:30～19:45 までの 5 つの番組内で各 15～20 分特集
■出 演 者：各番組パーソナリティ、古賀涼子アナウンサー（防災キャスター）、上田万由子アナウンサー、浅利そのみアナウンサー
■ゲ ス ト：渡辺実（防災・危機管理ジャーナリスト）→『TIME LINE』に出演
津田大介（IT ジャーナリスト）→『シンクロノシティ』に出演

<u>各番組の特集内容</u>

『BLUE OCEAN』（毎週月～金 08：30～11：00 放送中）
■特集時間： 09：05～09：15、10：10～10：20
■ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ： 望月理恵
■テ ー マ：オフィスワーカーの足取り
■特集内容：あの日、東京で働く大人たちはどんな行動を取ったのか。備蓄品にトイレ問題、エレベーターやセキュリティフロアへの閉じ込め……。そこから考える、オフィスで本当に必要な震災対策とは？ 帰宅困難者にならない＝ビジネスパーソンは可能な限り帰らず、救助・救出活動への参加という選択の提言と、実践している企業を取材します。
▽取材先：社員が会社に寝泊りし地域住民の安否確認を行なった戸田建設

『LOVE CONNECTION』（毎週月～金 11：30～13：00 放送中）
■特集時間： 12：15～12：30
■ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ： LOVE
■テ ー マ： ドライバー、大規模施設での人々の足取り
■特集内容： 震度 5 強の揺れを感じたとき、外にいた人々＝ドライバー、ショッピング客はどんな行動を取ったのか。また、どんな行動を施設側に指示されたのか。外出先でも普段から持ち歩くべきだったと後悔したものとは？ 施設側の対応に感じた疑問点や問題点とは？ OFF の時だからこそ心構えも紹介。
▽取材先：東京ディズニーリゾート

『シナプス』（毎週月～木 13：00～16：00 放送中）
■特集時間： 14：35～14：50
■ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ： やまだひさし
■テ ー マ： 親・学校・保育・子供の足取り
■特集内容： 電話もメールも全くつながらない中、父親は都心の企業、母親は郊外の店、子供は学校……。あの日、どんな問題が起きたのかを親子の目線でピックアップ。親と連絡が取れないことを理由に子供を家に帰らせた学校と、その問題点とは？ 逆に、子供を留め置くと決めた学校の決断と、その裏にある課題とは？ 子供に普段から教えておくべき災害時の連絡手段・待ち合わせ方法とは？ 緊急時に子供のお迎えを依頼できるコミュニティ作りにも踏み込む。
▽取材先：学童保育連絡協議会、保育園を考える親の会

『シンクロノシティ』（毎週月～木 16：00～18：45 放送中）
■特集時間： 18：10～18：30
■ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ： 堀内貴之、MiO
■テ ー マ： 新しい通信手段を駆使した若者の足取り
■特集内容： 震災当日、携帯電話は輻輳してダウン。メールもネットもつながりにくく、家族や大切な人との安否確認が出来ずにもどかしい思いをした人が大多数。そんな中、一部の若者だけが携帯電話を手に、スムーズに会話やメールをする姿が見られた。そこには viber、skype、veluga などのアプリが。電話ではない音声通信手段、メールではない文字通信手段。あの日、本当に使えた新たな通信手段を IT ジャーナリストの津田大介がスペイン坂スタジオに生登場して紹介するとともに、一方でそのデメリットや懸念点、今後台頭すると思われる、更に新たな通信手段をピックアップする。

『TIME LINE』（毎週月～木 18：45～19：45 放送中）
■特集時間： 19：20～19：35
■ﾊﾟｰｿﾅﾘﾃｨ： 伊藤洋一（経済評論家）、今井広海アナウンサー
■テ ー マ： 体が不自由な方・高齢者の足取り
■特集内容： 災害弱者と言われる、身体障害者と高齢者。あの日、どんな問題が起きたのか？ 高田馬場にある日本点字図書館は震災時、館内に十数人の視覚障害が。スタッフにも視覚障害者がいるが、利用者が少なかったことと、普段から訓練を行なっていたことで発生時は比較的スムーズに対応。しかし「揺れの後」がポイントに。帰宅困難者である視覚障害者への対応、近隣駅にスタッフが出向いて駅から締め出された視覚障害者の保護などを実施。食糧備蓄や毛布の用意も少なく、近隣に住むボランティアが家から米と炊飯器を持ってきて炊き出しを行なったり、毛布も用意したりと対応。災害弱者の立場では何が必要なのか、逆に健常者は何を手助けしなくてはならないのかにフォーカス。震災時に目が向きにくい問題に、『TIME LINE』がその独自の視点で切り込む。
▽取材先：日本点字図書館